

Title	日本古代經濟市場(西村眞次著, 東京堂刊行)
Sub Title	
Author	淺子, 勝二郎(Asako, Shojiro)
Publisher	三田史学会
Publication year	1933
Jtitle	史学 Vol.12, No.4 (1933. 12) ,p.160(740)- 161(741)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	書評
Genre	Journal Article
URL	<a href="https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-19331200-0160">https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-19331200-0160</a>

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

成立させた傳説であるとし、八、「矢取神事と水口祭」に於て、例の丹塗矢傳説を考察するに下鴨社に行はれる矢取の神事をもつて、之が水口祭との關聯を推し、九、「矢となれる父神」に、賀茂傳説の原始的な形式として大宮たるカモツミが玉依日女と婚して若宮を生むと云ふ形式を假定し、後に別雷神の威勢が盛んになるに及び、本來の父神が玉依日女の父たる位置に移り行つたのであらうと論じ、十、「若宮の降誕」に「ミアレ、ミアレオトメ」の信仰、「籠り」、成年式等の慣習と賀茂傳説との關係を述べ、十一、「三井社」に於て泉の信仰より賀茂御祖神社が發達せしことを推し、また下鴨の地主神たる出雲井於神社と御祖神社との關係を考究して、之を出雲系社會と賀茂氏との交渉と見ず、寧ろ同一社會の分化として上下の分離が起り、祭司階級が賀茂氏を稱し、その神を御祖神とし、他方は地主神にされたのであらうとし、十二、「競馬と猪頭」に此行事の意義を尋ね、十三、「總括」の章をもつて本研究の終りとしてをる。

著者は、關東八溝山下の出身であり、かつ滋賀縣奈良縣地方を久しく史蹟調査の爲踏査され、多くの民俗資料を採集され、その上京都帝大國史料の出身として國史考古學に造詣深く現に東京文理科大學に日本近世史を講ぜられてをる。著者が賀茂傳説を研究せられしは誠に其人を得たりと云ふべきである。其土地の古傳習俗に委しき氏の如き人物にして初めて此難解な傳説に明快な解釋が下され得るのである。もとより氏の判断が悉く妥當であるとは云ひ得ないかも知れぬ。例へばアヂスキタカヒコノ神を本來勤の神なりとされるのも、この神の他の神話傳説から見、また高彦

根といふ美稱から見、その他スキの名がス、キとかスギ(杉)と高くそばだち、とがつたものと類似してをる所から見、やはり天より降る神と云ふ性質を多分に認むべきではあるまいか。また氏の説かれる所が悉く盡してゐるとは云ひ得ないと思はれるのは例へばミアレギの事、葵のかづら等に就て叙述がないことである。然し氏は、最後に「この論攷は予の多少の苦心にも拘らず、なほ多くの點に於て而もその重要な點に於て問題を後にのこさざるを得なかつた。それらは更に反覆研究の上他日これを論定し、たく思ふ」と述べられてをる。吾人は、氏の如き歴史と民俗の兩方面に明るき人が、本傳説は云ふも更なり、更に各地の地方的傳説を批判研究され、世界無比の我國の神話資料の上に新しき學説を編まれんことを期待して止まぬ。要するに本書は、本年度出版神話學書中の最高峰に列つすべきものとして江湖に推奨する。(昭和八年五月出版、六卷より八卷まで合冊、定價貳圓六十錢、賣捌所、丸善株式會社)(松本信廣)

### 日本古代經濟 市場

(西村眞次著  
東京堂刊行)

本書は、著者が過去十數年來早稻田大學に於いて講ぜられてゐる日本古代史を総合的に集成せんとする念願に依つて生み出されたものゝ一部である。

著者は先づその序文に於いて、自らの歴史論述の態度方法を宣言してゐる。即ち立派な論述も資料不明なものには科學的價値を有たない。吾人は忠實に資料を蒐め、公平にそれを検討し、的確

眞實なる史實を把握し、其上に歴史的発展の過程を跡づけなければならぬ。豫め用意せられた理論に史實を當て嵌めるやうな歴史的論述は絶対反對であると、言つてをられる。

本書は節を分つこと十五、第一節緒言、第二節市場の意義及び其語原から第十四節平安時代の臨時市場、第十五節結言に及んでゐるが、最後の結言に於いては、結論を目的とし、更に、それを基礎として古代市場の發生、展開の歴史的過程を極めて手際よく要約してゐる。

著者も言はれる通り、本書は嚴密に言へば、「日本古代經濟資料」と言つた方が適當であるかも知れないけれども、その研究には、主として文獻學的方法を探り、市の起原、發生等に關しては、文化人類學的方法を用ひ、言語學的、考古學的、土俗學的、人文地理學的資料を用ひて、それを要領よく分類、整理、綜合してゐる點に、從來の經濟史と異つたところがあり、又其處に本書の自らなる存在の意義と價值とが見出されるのではなからうかと思ふ。吾人は西村氏のこの事業に敬意を表すると共に江湖に一讀を薦める所以である。(四六倍判、一七六頁、定價二圓五十錢、東京堂發行)(淺子勝二郎)

### 岩波講座「日本歴史」(黑板勝美編) 岩波書店發行

岩波講座は今回その第十次計畫として日本歴史(全十八卷)を刊行することゝなつた。編輯者は黑板博士を主宰者とする國史研究會同人を中心として權威ある先輩と新進とを網羅してゐる。而

して本講座の目的は日本民族が、その搖籃時代より現代に至るまで政治外交社會經濟文化思想等あらゆる方面に於て如何なる變遷如何なる飛躍をなしたかについて組織的な知識を供せんとするにある。内容は之を「總説」「本編」「別編」「參考編」に分ち百三十六の題目を立て、それを各大家が分擔し更に「年表」を附してゐる。今回その第一回配本として、「皇家中興の大業」(黑板勝美)「憲法の制定」(藤井甚太郎)「政黨の發達」(尾佐竹猛)「中世に於ける國體觀念」(平泉澄)「城郭の變遷」(鳥羽正雄)「律令制度」(瀧川政次郎)が刊行された。これを一讀するに、本講座の特色とする學界最近の専門的研究を平易に解説すること、解説の簡明平易にして的確なること等がよく表れてゐる。従つて廣く一般の人々に日本歴史に對する感興を起さしめ祖國に對する關心と理解とを與ふるに貢獻する所が甚だ大であると思はれる。かゝる廣く讀まるゝ講座の執筆者は、あくまで學者としての良心と責任とを感じ、一般の人々に眞の日本を知らしめる爲めに記述さるゝことを特に希望する次第である。(今宮新)

### 歴史地理索引(日本歴史地理) 學會發行

索引位研究者にとつて必要であり且つ便宜なるものはあるまい。今回日本歴史地理學會より吾々の待望してゐた本索引の刊行された事は「歴史地理」が多年學界に重要な地位を占めてゐるだけに研究上非常なる便宜を與へらるるものである。本索引は第一卷第一號(明治三十年十月號)より第六十卷第六號(昭和七年十